

Book

読 書

インドネシア9・30クーデターの謎を解く

スカルノ、スハルト、CIA、毛沢東の影

千野境子著 (草思社・2205円)



1965年、ジャカルタで発生した「9・30事件」の経緯を、そのアクター(行動主体)の心理の深層にまで想像力を働かせて書きこんだ迫真のドキュメントである。

陸軍左派が陸軍首脳を殺害して革命評議会を設置、陸軍戦略予備司令官のスハルトが左派を直ちに鎮圧、同時に左派の黒幕をインドネシア共産党(PKI)と見立てて党員を大量殺戮、PKIを政権基盤の一つとしていたスカルノ

の政治生命をも剝奪した事件が、9・30事件である。

しかし著者は、以上のような要約では収まり切れない複雑にして怪奇なる60年代のイ

主役たちの深層心理に迫る

インドネシアをめぐる国際環境の帰結として、この事件を描く。当時、非共産圏で最大の300万人を擁する党員勢力を誇っていた存在がPKIである。スカルノがその政治基盤をナサコム、すなわち民族主義と宗教と共産主義の3勢力の均衡の上に求めざるをえなかったほどの力をPKIはもっていたのである。

評・渡辺利夫

(拓殖大総長)

この時期のPKIの背後にいたのは毛沢東である。毛は、東南アジア諸国のゲリラ闘争がそれに抗する米軍の「力の分散」につながり、「世界革命」を中国に有利に導くと判断していたと著者は説く。一方、ベトナム戦争で苦戦を強いられていた米国は、インドネシア共産化の余波がアジア全域に及ぶ「ドミノ現象」を恐れていた。米国は反スカルノ、親スハルトに隠然たる力をみせたものの、事件のアクターではない。しかし、スハルト政権誕生後のインドネシ

アが米国の支援なしに存在しえたとも思われない。本書を読んで胸が締めつけられるのは、権力を喪失していくスカルノの人生最後の悲哀についての記述である。活路を外敵に求めて、マレーシアとの対決政策の拳に出るものの、国軍はすでにスカルノを見限っていたと著者はいう。対決政策が失敗に帰するや、その空漠たる政治状況を見据えて、東南アジアに次第に協調的な空気が流れ始め、ASEAN(東南アジア諸国連合)が成立する。9・30事件を通じて初めてみえてくるアジア国際関係史が、本書のもう一つの主題である。